

う、又よろしく御教導賜りますようお願いする次第である。

ただいま聴講生です

佐藤由子

学生時代の4年も公立中学教諭時代の10年も真面目に勉強してきたとはいいいにくい私が、11年の専業主婦時代を経て、非常勤講師として教職にもどった時、当然のことながら、劣等感に苦しむ羽目になりました。「悩みがある時は前向きに突破するに限る。」と思ひ、お茶大を訪ね、1科目だけの聴講生の手続きをとったのは、今年の9月でした。(浅海先生や貝山さんがいらっしやったのは幸でした。)

はじめはノートをとる手もふるえる感じで、わからないことだらけ、(細々とでも勉強しておくのだった!)とにかくわかったことだけをノートし、推せんされた論文や本は片っぱしから読み、そのうちに何とかなるだろうという感じで、ひたすら皆勤をめざし、しつこく質問しました。

「なぜ学校に来るのですか。」という問は度々受けました。「昔もいい加減な勉強であった上に、忘れてるし、新しい知識も仕入れないと生徒に申訳ないからです。」と答えていましたが、ある時「食べ物と共に、勉強に飢えて育ちましたので、それを満たすために」と答えてしまってから、これが案外ホンネであることに気がきました。

戦争が末期的症状を呈してきた頃、13才の私は、ヨイトマケで飛行場の整備をしていました。こんなことをしても使わないうちに全滅だと思いながら、ふと急に、「勉強がしたい」「本が読みたい。」「活字に接したい。」「教室にすわりたい。」という思いがつきあげてきて、耐えがたく、涙があふれてきました。……戦後、本屋や音楽会場の前に行列ができたように、「文化」に対する人間の飢えは、空腹のそれにもおとらない苦しみであると、その時実感しました。その後やっと大学には入ったものの、学資だけでなく、生活費も稼がなくてはならない私は、やりたいただけ勉強したということなく卒業し、続いて仕事と育児に追われて過して来ました。

非常勤講師は不安定な身分で、ことに地理は縮小される傾向の今、よい授業をするために勉強しても、先行はわかりません。しかし、私の年来の飢えを満たすための勉強なら、私が意図する限り、放り出される心配はありません。それに、頭は少々老化していても、学生時代より有利なことだってあります。1)就職・結婚・育児などの心配がない。2)恋愛・学生運動に心をときめかすことがない。3)経済的安定。4)何年かかってもよい。5)社会科学は、長く生きてきた方が理解できることもある……等。あと30年余命があるとして、10年位しがみついていたなら、若い人の3~4年分位の勉強はできるかもしれないと、負け惜しみも交えて肯定的に考えることにして、今年も元気よく、教師・学生・主婦をやっています。当初の目的であった劣等感の克服もよい方向にむかっていますし、それにもまして、実生活の経験や見聞が、少しずつ体系づけられ、薄紙をはぐように、明瞭にみえてくる楽しさは、社会科学の一つを選んでよかつたと思わずにはいられないのです。

「巡検があつたら連れていって下さい。」とふれ廻って、もう4回いきました。キャラバンシュー

ズ・リュック・ズボン・軍手という古典的地理学生スタイルを笑われながら、先生方も学生諸氏も寛大で、よくして下さるので、大満足です。ただ一つ不平を言えば、大学は毎年入学科と検定料をとらないで、継続に抜ってほしいということです。（3回生）

日本国際地図学会昭和 54 年度定期大会に出席して

太 田 晴 子

8月2～3日私立郁文館高校で行われた地図学会の要旨と感想を述べ、諸先生、先輩方のご指導を仰ぎたい。

〔地図史に関して〕官撰明治国絵図についての斎藤敏夫氏の発表は興味深いものがあった。藩籍奉還に伴って作成された国絵図が日本各地の図書館などに死蔵されている。それらの図は地形表現の正確さ、機能と実用性に優れているので、その完璧な保存と今後の研究課題となるものである。その他ご老体に鞭打って発表された井阪篤子氏、大久保武彦、武田通治両先生がそれぞれの味わいある講演をされた。

〔地名について〕池上中学の前田吉穂氏、高輪学園の森秀雄氏からそれぞれ別の観点から発表された。私の仕事（百科事典の編集）とも関係する問題なので、意見の交換をすることができた。前田氏は住居表示と地番の混同や新しい地名が安易に付けられて、複雑化していくことへの警告、森氏は高等学校の地図帳において、地名が地図上をおおう率が高く、そのことが地図を見にくくしている要因の一つとして仮定した考察を発表された。特に中国関係は漢字とカタカナの二重表記のため、上海付近では地名の占める割合は35%にも達するというは驚きに値する。この発表に対して、中国や北方領土付近の地名を教育現場では、どのように扱っているかと質問したところ、「文部省の地名の書き方、呼び方について」の基準に従いながらも個々の地名に関しては教師個人の判断によるところが大きいとの答を得た。この件に関して、早稲田大学の久保武彦先生からスイスやフィンランドのような公用語の多数ある国では、その数だけ連記しているので、おのずと地名の占める割合が多くなっている。日本の地図帳でも重要な地名には2通り以上の連記（カタカナ・漢字・英語・原地語）が望ましいとの意見が出た。ただ教科書と一致させること、生徒の理解度も考慮すべきという問題が残されていることがはっきりした。

〔衛星画像の教育的利用〕航空写真と視覚、衛星画像合成の試作などの最も今日的な発表があり、航空写真や衛星画像が地図作成や教材として広く利用されていることが伺えた。ただここで最も驚かされたことは、鈴木信吉氏の航空写真と視覚の中で、左45°の光線で描かれたボカン地図の凹凸が、全ての人に必ずしも凹凸に見えないということである。10年前にもこの実験をした人があるが、結果は50、50であるとの意見が出された。しかし、私はボカン地図には、コンター（等高線）地図の正確さとは、また異なった良さがあるのではないかと考えている。私自身昨年夏に開かれたワシントンでの地図学会の際、フィリップ社の編集者と語り合ったことを思い出す。ヨーロッパでは、趣味的な地図としてボカンやケバを用いた地図を見受けるとのことである。